

六

花



11

2023

りっかはいくかい

月

山田 六甲

名月の雲より速く走りけり

雨あがる九月六日をダイアナ忌

ダイアナ忌二階建バス角曲がり

後の月鶴鳴きさうな雌岡山めつこさん

迷ふ姿に乾きぬて蚯蚓の晩夏

後の月自分のやれることをやる

四阿の天井を這ふ鳶もみぢ

柿の実のいろづく坂を上りけり

遊んだ手働いた手や茸鍋

菊花賞馬女があれば俳女あり

鶴の鳴くわら人形の釘あとに

梅花藻の水に落ちたる木葉かな

飛行雲尻より糸を吐きとぶ蜘蛛

室蘭や栗鼠跳ぶ冬が近づくと

滝川へ枝のべてゐるうす紅葉

早風呂をすませて麦酒もう寒し

スコッチを舐めて句を練る十三夜
蝶よりもひらひら水の十三夜

ひらひらと胡蝶のごとく後の月

後の月誰も聴かない琴を弾く

冬に入る不動の岩峰移ろふ雲

桐一葉鯉の如くに流れけり

後の月胡蝶のごとく波の上

満ち足らぬところが不明後の月

月兔不老不死薬搗きぬるか

十三夜水にゆらぐは言ひたらぬ顔

十三夜月の影なき巴水の画

十三夜欠けし部分にものおもふ

川瀬巴水の「笠岡の月」は月の出ていない版画

月白や川瀬巴水の版画かな

泣き虫の月の夜汽車で母は来る

秋華賞制すりバティーアイランド

山形米沢にて

鮫の歯に劣らず洞の初氷柱

月のある淡海の北の水澄める

後の月跨ぎて舟の大揺れす

噴水の高さに子らののびちぢみ

升田ヤス子

ふんすいのたかさにこらののびちぢみ　ますだやすこ
事实は噴水が伸びたり縮んだりしているのを子供の行動に転化して詠んだ。ヤス子も自身の俳句を前向きに進歩させようと日頃鍛錬して飽かない。その努力が実っている。

六

天瓜粉はたき役者のやうな顔

志方章子

てんがふんはたきやくしゃのようなかお　しかたあきこ
「まあ」という母親の驚くやら笑うやらの表情が思い起こされる。天瓜粉は昔は烏瓜を原料としていたが現代は『小児必用養育草』（香月牛山著）にも記述のある天瓜粉（天花粉）ですが、これは、ウリ科のキカラスウリ（天瓜）の根からとった白いでんぷんのこと。そのでんぷんは水分をよく吸い取るので、その吸湿性を利用してあせもの治療に用いられてきました。その粉末が雪（天花）のようにサラサラしていることから、天瓜粉と呼ばれています。（和光堂ホームページ）という。六

母の硯 ◎ 笹村 政子

洗ひたる硯の乾く迅さかな
 撫でながら母の硯を洗ひけり
 鮎売りの入つてきたる勝手口
 玻璃ごしの鬨竜灘に鮎跳ねる
 夕端居ことば途切れし父とみて
 白南風や海へ戻せる耀の水
 軒下の七夕竹の匂ひけり
 七夕や母の紙繕のうつくしき
 ほつれたる母の針山星祀る
 ふるさとの空撓みたる七夕竹

こほろぎ抄

夏の星 ◎ 志方 章子

風鈴に眠りの邪魔をされにけり
 晩夏かな一人暮しに終りなく
 サイダーを好みし父の蘇る
 古浴衣母の面影薄れざる
 星月夜異界にありぬ心地かな
 からつぽの頭となりし昼寝覚
 天花粉つけて役者のやうな顔
 秋といふ言葉そぐはぬ日差しかな
 縁側に夫の来てゐる流れ星
 茄子漬のあらば事足る夕餉かな

撫でながら母の硯を洗ひけり
 鮎売りの入つてきたる勝手口
 夕端居ことば途切れし父とみて
 軒下の七夕竹の匂ひけり
 ふるさとの空撓みたる七夕竹
 いずれをとつても味わい深い匂ばかりで気負いがな
 い。これこそ俳人の目指すべき境地であるし、日頃の
 研鑽の成果である。特に母の硯を生きている人の
 ように愛おしみながら撫でる仕草がいい。

※訂正10月号で「但馬の国一宮」の場所を間違
 えて鑑賞しました。出石神社（いずしじんじや）の
 所在地は、兵庫県豊岡市出石町宮内99。豊岡駅南
 東約9キロのところにある式内社（名神大社）。

「旧社格は国幣中社で、主祭神は、伊豆志八
 前大神（いづしやまえのおおかみ、出石八前大神）
 と天日槍命（あめのひばこのみこと）で、この神
 社の由緒は、境内に記載がなく、またホームページも
 ないので紹介し難い」

とネットに。ヤス子からもらった「岩引きの図絵馬」
 には「天日槍命」は垂仁天皇三年春新羅の國より渡
 来され但馬國出石の地に居を定められた」とある。

天瓜粉つけて役者のやうな顔
 晩夏かな一人暮しに終りなく

縁起でもない話だが、夫を亡くして、もうこのまま
 一生を終えるのではないかと考える。終わりなくと
 は未来永劫に、といふことと誠に哀しいことである。
 人間生きていけるのは、もしかしたらこの先何かあ
 るかもしれないという希望あってこそ、生きていけ
 るのだ。終わりがなくことは際限なく現状が続くの
 で、仏法でいう末法である。別に弘法のようにあな
 た一人ではありませんよ、と言ふ思想もある。「天
 瓜粉つけて」の句面白い材料の気づき。夢風撰。

噴水の高さ ◎ 升田ヤス子

櫓ふと歪んで見ゆる炎天下
城垣にやさしき影を姫女苑
蛇の鬚の花の築山ありにけり
噴水の高さに子らの伸びちぢみ
蓮の葉に転がる露のあやふさよ
花合歓や胸に望みがぼと灯り
合歓の花傘をひらかず落ちにけり
ゆらゆらの葉が楽しいか空蝉は
門灯に羽蟻や何か言ひたげに
朝からの鴉うとまし梅干して

噴水の高さに子らの伸びちぢみ

この情景、素直に見て俳句的に言い換えた芸の素直さを見せて結構表現的の妙も伺える発見。この人は自らの感覚を老化させない磨きがある。子供の背丈の違う行動が噴水の高さに合わせたのを伸び縮みとして子供の動きまで見えるようだ。夢候補。

空蝉とは、蝉の抜け殻を指す言葉で、光源氏が口説こうと部屋に忍び込んだとき、上着のみを残してするりと逃げてしまったことからそう呼ばれたという。が、実際にも蝉が生まれようと脱皮後の姿であるから、まるで生きているように人は憐れみと親しみを持つ。掲句もまるで生きているように呼びかけた句で、葉に取りすがって風に揺れているのは楽しいからだろうと言ったのである。これが文芸の芸。「楽しいか」という呼びかけは「楽しくはないだろう」との哀れみでもある。

蛸や ◎ 廣畑育子

蛸や森は静寂を広げぬて
玉虫を握りて爺の破顔なり
玉虫を捕虫網よりつまみける
夏潮やほろく島は地図に無く
蛸干しのしづくのままに乾きをり
滴れるマリーゴールド昨夜の雨
撒水の音に合はせる吐息かな
極楽へ飛び出す音や蓮開く
明け空の叢雲高く秋立てり
叢雲の籠の蠢き秋に入る

蛸や森は静寂を広げぬて

静寂とは、しじま。ひぐらしとはなんとも物悲しく響き鳴くのでろう。かなかなというのは俳句的であるが、あのよく響き渡る鳴き声が却って静かさを感じさせるのは一体何なのであろう。もしかしたら、「もつ口が暮れますよ」といつ哀しい触れのような声かも知れぬ。今は照明が進んで夜がそんなに怖くないが、昔は夜（闇）という別の世界がやってくる前触れで怖く寂しいものだったに違いない。山や森でその声を聞くと、早く帰りなさいと促されている気分をの魂を揺るのである。煩い声が却って静寂を広げると育子は言った。蛸の句も佳いが夏潮の句夢風撰。ほろろく島は地元では皆が知っているらしい。通称なのか。

白南風 ◎ 永田万年青

蝶とんぼ葦の葉先に揺れもせず
夏空や櫓の横に雲ひとつ
おほかたは看護師の書く星祭
七夕や健脚願ふりハビリ室
てつぺんに四字の筆書き星祭
白南風や汐の香りのセンター街
白南風や釣り船の水脈長かりき
白南風や湾を一望せし木椅子
外に出て危険な暑さに引き返す
橋の上暫し涼風受けにけり

酒吞(ささの)ゆ

秋の蚊 ◎ 谷口 一献

妖しげな貌して孫の笹飾
野分来るまた直ぐ後に次が来る
野分立ち鳥居の丹色剥がしけり
真つ白な海月は無色海青し
瞳より先ず鼻で識る金木屋
秋の蚊をそつと優しく殺しけり
秋花火済みて淡墨色の空
暑気の止む気配全然今日は処暑
群で来て群で翔び立つ小鳥かな
真ん丸の名月夜を金色に

白南風や汐の香りのセンター街

白南風(しらはえ)というのは梅雨明け近くの明るい南風で、ときに風景が白くかすんで見えることも。そのころには港に近い神戸一番の繁華街のセンター街に海風が吹いてくる。というのだ。リハビリに通う日々の中で病院には七夕飾りがあって願いの短冊が患者や看護師によって願い事が書かれて吊るされる。が、この病院の飾りにはほとんどが病人に代わって看護師が書いている。この句眼目はほとんど川柳に近い材料。俳人は短冊を題材に句を詠めばよい句が出来ると思うのだが。もつと粘り強く取り組んでみるのも折角の機会だから良いと思う。白南風や湾を一望せしの句をもつと踏み込んで詠むとよい。橋の上の句はしばし涼風を楽しんだという句は素直な心地を詠んでいるので好感が持てる。

秋の蚊をそつと優しく殺しけり

秋の蚊は弱っているようで結構刺されると痛い。刺されるといふより噛まれた感じがする。秋の、とあるから残りわずかな蚊の命で哀れただけれど此畜生と思うほどに痒い。だから優しく殺したのである。007の映画のタイトルのように「優しく殺しで」などというのが怖い。また「暑気の止む気配」などない、という心情はよくわかる。昔は暑くてたまらないときには灸を据えてウーっと耐えて見たものだけれど。処暑というのは処暑の「処」には止まるという意味があり、暑さがおさまる頃なのだが一向にそんな気配がないよと言っている。季節はもう少し後になる。暑さ寒さも彼岸まで。しかしもう彼岸は越えた。「群で来て」といふのはいかにも小鳥らしい。

かなぶん ◎ 田尻 りさ

金蚤の追詰めらるる階段下
 今もなを蝉を掴みぬる婆
 そういう時代だつたよ原爆ドーム
 肩口を舐めて確かむ汗の味
 次の世はいらぬ微かに秋の風
 蟋蟀の鳴きははじめたる窓を開く
 白南風や最期の言葉「おとうさん」
 ハンモックに囚われて子の躑きぬる
 流行歌は思ひ出の目次さるすべり
 バイバイと蝶と蝉とを放ちけり

つつじが丘

白南風 ◎ 延川五十昭

白南風やペットボトルの中華文字
 白南風や楠の葉裏の吹き返し
 白南風や潮目の変る橋の上
 しらはえや骨董市の伎楽面
 紫電改形は残り稲の秋
 雲の湧く葡萄ひと房峠茶屋
 店いつぱい油彩画ならべ秋日中
 採りたての無花果ジャムの朝餉かな
 ナツメロに合す口笛秋深し
 柿たわわ特攻隊の遺品館

金蚤の追い詰めらるる階段下
 金蚤が家に飛び込んできて家族で大騒ぎ。あちこち飛び回って階段下でやっと捕まえたのだ。ところでかなぶんのフォント文字がワードにないから一太郎から取り込んだ。もしかしたらメールで印刷に送ると文字化けしているかも。但し下六になるから何とか工夫が必要。また最近では照明に昔のように虫の好む波長が少ないから民家近くに夜飛んでくる火取り虫などあまり見かけない。味気ないと言えば味気ない。ハンモックに囚われて子供がもがいているというのも面白い。もがくまえにこけて落ちるとおもうのだが、句のような場面もあるだろう。

「蟋蟀の鳴きははじめたる」の句、窓を開けてはつきりと蟋蟀の声を聴きたいと思うのが風雅でもある。

白南風やペットボトルの中華文字

ペットボトルが海に流れついて、その瓶をみたら中華の文字が印字してあって外国から流れ着いたと分かる。潮の流れが日本へ向かって来るからだ。だがある国は日本から処理水を汚染水として影響があるとボイコットしているというが果たしてどうか。北朝鮮、中国へは日本から潮の流れでいえば流れていかない。その逆は大いに向こうから日本へは流れてくる。

骨董市は関西では京都の東寺が有名。「伎楽面」とは古代日本で演じられた仮面舞踊劇である伎楽に用いられた仮面。世界最古に属する面としてその歴史的意义は大き

いと百科事典に。彼は歴史的美術的なものに興味を持ち造詣も深い。柿たわわの句、特攻隊の遺品館の庭に生った柿の実に目を付けて詠んだ。この柿ももしかしたら戦時中に成っていたかどうか。

野分して ◎ 延川篁子

野分して大女郎蜘蛛身じろがず
白南風や海の男で在りし頃
白南風や十四代目の墓仕まひ
白南風や亡き人からの着信音
白南風や根の国こそ暑さあり
白南風や南の島を焼き尽し
鶉野の道を良く知りかたつむり
夏の野や一本だけの滑走路
飛び立てる若者の遺書夏の雲
母想ふ特攻の子や雲の峰

須磨の奥抄

外人墓地 ◎ 草場つくし

七夕や願ひは風に見え隠れ
七夕や逝きし姉へのメッセーじ
七夕やお迎へあれと太き字で
朝霧の小さきひかりを踏まんとす
水澄むや逆さ櫓の壁白く
海のぞむ外人墓地に朝の露
コスモスや反抗期なる子の部屋に
爽籟や斑鳩の寺目の前に
秋空に認知なんぞやケセラセラ
小鳥くる斑鳩寺の昼下り

野分して大女郎蜘蛛身じろがず

女郎蜘蛛の貴祿。蜘蛛とはいえ、大人でもたじろぐ昆虫。と書いたがよく調べてみると「蜘蛛の巣を組む虫」または「黒い」「隠（ごもり）」から由来するらしい。クモは中国語で足長蜘蛛を表す「喜母」から由来するという説もあったが、今は否定されている。語源は「蜘蛛の組む虫」または、黒い隠（ごもり）から由来する。国語語源辞典」という。この句「野分の最中に」とでも言おうか。女郎蜘蛛は怖い。因みにわが家では蜘蛛君と読んで机の上で遊んでいるので可愛がっている。物静かで可愛いのである。蜘蛛を逆さに呼んだらもく（黙）であるし。夢風撰候補。

海のぞむ外人墓地に朝の露

いつから外国人を外人と呼ばなくなったのか知らないが、避暑地で有名な軽井沢で昔から住む外国人は「私たち外人は」と言っている。だから外人墓地は今でも外人墓地だと思っ。情緒があるから。神戸の外人墓地は今は何というのだろう。調べてないがきっと修法が原の神戸外国人墓地というのだろう。その墓地は紅葉がひどく美しい。

朝霧の句も写生眼が光る。朝露に宿した小さな光に行動を起こす理由が何なのだろうと想像が広がる。爽籟の斑鳩寺とは播州の斑鳩寺でホームページによると「斑鳩寺は姫路市とたつの市にはさまれた揖保郡太子町に位置し、この地は法隆寺の荘園「鶴荘（いかるがのしょう）」があり、その中心に荘園経営の中核的存在として、政所とともに斑鳩寺が建立されたとある。聖徳太子の荘園だったといわれ縁が深い。その寺に小鳥が来たというのである。

「小鳥来る」は渡り鳥のやってくる秋の季題。

流燈 ◎ 江見 巖

夕端居顔の縦皺ふえにけり
 裸子の底を蹴り上ぐ地球より
 向日葵やカーブを投げる球覚え
 睡蓮や色のいろいろ万華鏡
 鬼灯や男にはなき赤き頬
 人につき風船葛裁判所
 カメラマンカメラの後ろ蓮の花
 仏壇の鬼灯一つ赤くなり
 ラベンダー一本つつの恋を持つ
 夜学生一人減りたる明かりかな

箕面抄

出の悪きペン ◎ 出口 誠

出の悪きペンにいらだつ秋の朝
 影の中涼しさ想ふ残暑かな
 秋の昼息子がおかず残しけり
 好物のはずのおかずよ秋の昼
 傘持ちて秋の嵐に濡れにけり
 台風にズボン濡らして歩きゆく
 台風が木を踊らせてをりにけり
 台風が木々をあふりてをりにけり
 台風が木々をなぶりてをりにけり
 題目で一句ものにし秋の宵

向日葵やカーブを投げる球覚え
 故赤松君に「台風は魔球を覚え新カーブ」という句があった。それは灘中学の試験問題になったが、そういう句であろう。向日葵の俯いた姿から来る連想か。が今はカーブぐらいでは打たれる。速球投手は打者の目の前で曲がるのだが、揺れながら曲がるので怖い。

同時句、「ラベンダー」は初夏に咲く花で香りのよい花。北海道の富良野が有名だが、まだはつきりと歳時記には載ってなく、一部の歳時記には載っているかもしれない。句いはすでに人がよく知っている。ラベンダーは、疲れを癒し、心地よい眠りができるし、精神的なストレスを和らげて緊張をほぐしてくれ、不安や緊張で眠れないときやイライラしているときに飲むとよく、気分を落ち着かせリラックスさせる効果がある（百科事典）という。一本ずつの恋というのは虫の交配を待っているという意図かも。夜学生の句は秋で、普段でも少ない生徒がまた一人減って寂しさが増した、という句。

出の悪きペンにいらだつ秋の朝

ペンとはボールペンであろう。少し涼しくなつてインクが固くなつて出にくいのか、残り少なくなつて出にくいのか分からないが、さつと手にもつて書き出しが悪くなつたのであろう。それにいらいらしているのだ。爽やかな秋の朝であるのに不幸なことである。「秋の昼」の句、息子がおかずを残したことが気になつている。というのも事情があつて、おかずを作ったのは作者本人であろう。どうして残したのかあれこれ気になる。題目での句。題目を挙げているうちに一句思いついた、というより一句賜つたのであろう。句は受動的に授かったという考えに賛成。